

中学生の不登校が大きな問題になっているが、こうした生徒を受け入れる高校段階の教育機関は非常に少ない。そうした実態にあって、大阪市西区の専門学校は授業に演劇を取り入れるなど通学を続けさせる工夫を凝らしてきた。今年度からはファッション専門学校と連携し、演劇の衣装合わせを手伝ってもらっというユニークな試みを行っている。その成果やいかにと、私はいくさんの現場を訪ねた。

■卒業公演目指し

大阪市西区の大阪YMC A国際専門学校。05年4月に「表現・コミュニケーション」学科(表コミ)を開設し、いじめなどで不登校気味になった生徒らを受け入れている。

不登校生徒は全国の中学校で10万4153人(08年度)にのぼり、全生徒の約3%にあたる。しかし、不登校生徒を受け入れる公立高校はない。受け入れを表明している一部の私立高校でも、入学後に生徒をバックアップする体制は十分に整っていない。だから、私は不登校生徒や家族の悩みの大きさを想像するにつけ表コミに注目する。

表コミは、一般教科の授業を行い、高校卒業資格の取得を目指す。加えて、社会に出たあと良好な対人関係を築けるように「人間関係トレーニング」「マナー」などの授業を実施している。演劇も2年生から行う目玉授業の一つといえよう。3年生の練習は約半年間で、卒業記念公演をするのが恒例だ。それぞれの役割

「不登校」受け入れる専門学校

編集委員・大島秀利



ファッション専門学校の学生に演劇用メイクを施してもらった表コミ・コミュニケーション学科の生徒ら(ともに大阪市淀川区)

演劇通じ社会へ一歩

人が卒業見込みで、うち20人が大学や専門学校などの進学を決めている。

■心を開放

演劇を指導しているのは

を担って劇を演じるなか

で、自分と違う価値観に出会える。さらに、級友と一緒に舞台上で立つ人前で話すため、達成感を得られ、自己肯定につながるという。こうした独自の授業が効果をあげている。過去2年間に、42人が出席日数規定の3分の2を達成して卒業した。現在の3年生は、編入を含め32人が入学し、23

このとき植村さんは、演劇がコミュニケーション能力を高める重要な手段になったと、学校に通い始めた。

を担って劇を演じるなかで、自分と違う価値観に出会える。さらに、級友と一緒に舞台上で立つ人前で話すため、達成感を得られ、自己肯定につながるという。こうした独自の授業が効果をあげている。過去2年間に、42人が出席日数規定の3分の2を達成して卒業した。現在の3年生は、編入を含め32人が入学し、23

り得ると確信したという。以降、引きこもり気味の若者に対する就労支援のためのコミュニケーションプログラムで演劇を活用するなどしてきた。

「演劇に登場するさまざまなキャラクターの感情をまなキヤラクターの感情を

理解することは、自分自身が心を開放するきっかけになります。その説明する植村さんは衣装やメイクについて「キャラクターになりきる魔法をかけてくれる」と語り、重視している。効果

をさらに高めるため、植村さんはファッション系専門学校と連携することを考えた。双方の学校に有用なプログラムを構想しながら、

約1年間、相手校を探した。大阪文化服装学院(大阪市淀川区)が応じてくれた。話し合いを進めた結果、ス

タイリストの勉強になることから、同コースの学生37人が演劇の衣装とメイクを担当することになった。

表コミ3年生が演じている劇は卒業前の生徒たちをめぐめるストーリーだ。昨年10月から練習を始めた。

面校による衣装合わせはまずゲームなどで心をほぐしてから始める。役者(表コミ生徒)が服装はこうしてかまされる。役者(表コミ生徒)が服装はこうしてかまされる。役者(表コミ生徒)が服装はこうしてかまされる。

3回、約5時間に及んだ。役者1人に1、2人がついてスタイルを考え、服のサイズを合わせたり、ヘアセットやメイクを手伝った。

こうした授業の結果、中学で2年半不登校だった大阪府枚方市の男子生徒(18)は表コミをほとんど休んでおらず、大学進学も決まっています。劇では主役を演じていた生徒たちが社会とのつながりを見いだしていく姿は、社会全体が見失がちな大事なものに気付かせてくれるように思えます。

さまざま役割を担う人たちがつくりあげる演劇。異なる学校の若者が共同作業する現場には、楽しさと緊張感が混ざり合っているように感じた。孤立を感じていた生徒たちが社会とのつながりを見いだしていく姿は、社会全体が見失がちな大事なものに気付かせてくれるように思えます。

また、東大阪市の女子生徒(18)は中学の後半1年半は登校できなかったが、大学に合格した。ファッション学校の学生さんは話をよく聞いてくれ、メイクや服装が想像以上に上手になり、とても満足です。化粧をしたことがなかったけれど、初めて自分でもしてみようと思ったと笑顔をみせた。

スタイリストを目指す桑田亜紀子さん(19)は「喜んでくれていいのかを考えると、それが大事なんです。一言づつでもいいので、言葉づかいも大切ですね」と実感する。

卒業公演は3月8日で、面校関係者が招かれる。表コミ学科長の鍛冶田千文さんは「初めて会った学生と信頼関係を構築したのは大きな成果です。ファッション学校の学生のためにも頑張ろうという気持ちも芽生えているようです」と話している。